ヒップホップダンサーにおける
自身の踊りに対する認識に関する基礎的研究

― 即興と振付けに着目して ―

A study on awareness of own dance in hip-hop dancer

― focus on Choreography and improvisation ―

次世代教育学部こども発達学科
高田　康史
TAKATA, Yasufumi
Department of Child Development
Faculty of Education for Future Generations

キーワード：ヒップホップ，ストリートダンス，振付，即興

Abstract：In this study, we investigated using interviewed about the differences between perceptions of choreography and improvisation of hip-hop dancer.
For hip-hop dancer, improvisation is a dance for the self-expression, choreography, a dance to align in a group. It is thought that comparing the interview of a person skilled and novice, who skilled person is currently caught multifaceted more specifically hip-hop dance.

要旨：本研究では，ヒップホップダンサーの即興と振付に対する認識の違いについてインタビュー調査を用い検討を行った。ヒップホップダンサーにとって，即興は自己表現をするダンスであり，振り付けは，グループで揃えるダンスである。初心者と熟練者のインタビューを比較すると，熟練者の方がヒップホップダンスについてより具体的に多面的にとらえていることが分かった。

Keywords：hip-hop, street dance, solo dance, Choreography, improvisation

Ⅰ　はじめに

近年，中学校保健体育科におけるダンスの男女必修化や，情報番組やバラエティ番組などのTVの露出の増加などを受け，ダンスには大きな注目が集まっているといえる。

ダンスの中でもストリートダンスとは，ヒップホップ，ロック，ブレイク，ジャズなど多種多様なスタイルを含むダンスである。元来，ヒップホップという文言は，ダンス自体を指す言葉として存在していた訳ではなく，1970年代頃アメリカのニューヨーク市ブロンクス区で「ラップ」「DJ」「グラフティ」「ダンス」の４つの要素を取り入れた文化の総称とし発生した言葉である。この文化のとしてのヒップホップは，アメリカのスラムやギャングの文化とも関連が深いともいわれる。また，ダンスジャンルとしてのヒップホップは，1980年代後半のI.S.D（インターナショナルステップダンス）やNew Jack Swingなどの影響を受け，1990年代初頭ごろから主にラップミュージックに合わせて踊るダンスとして発展してきた。（ダンスインストラクター協会，2012）。ヒップホップやそれの派生にあたるダンス（ヒップホップ，ジャズヒップホップ，ガールズヒップホップ）は，TVの音楽番組等でもよく目にするようになってきている。また，ヒップホップはダンス教室などでこどもの習い事の一つとして定着し，「小学校のためのカッコカワイイなりきりダンス」（杉浦，2011）や，「楽しいHIP-HOPダンス入門」（井上，2012），「はじめてでもすぐ踊れる！ヒップホップダンスfor kids」（SAYAKA，2012）など児童向けのヒップホップ関連書籍なども販売されている。

ヒップホップやストリートダンスに関連する先行研究の概観を示す。清水ら（2011）は，ストリートダンスの中でもブレイクダンスに着目し，ダンサーのソロ

ダンスの中でも，即興に着目しその生成過程についてバトル形式，ソロダンス形式での違いについて考察している。内山（2007）は，ストリートダンスの技術を使って大学生を対象に授業実践を行っている。ここでは，指導方法として振付の模倣を中心として授業を進めており，対象学生は指導後の自由記述の中で爽快感や達成感を得ており，模倣による指導において一定の成果を挙げている。また，田中ら（2012）は，熟練者と初心者の動きの違いを客観的に検討するためにモーションキャプチャを使った実験を行っている。また，高田ら（2012）（2013）は，中学校保健体育科における授業実践に基づいてその生徒の学習の成果や，単元前後の運動有能感についての好影響を検証してきた。

これまでの先行研究を概観すると，主に清水ら（2011）や高田ら（2012）（2013）のように即興やアドリブを中心としたソロダンスを取り上げたもの，内山（2007）や田中ら（2012）のように振付や振付の中の技術に着目したものがある。日本で最大規模のダンスイベント運営会社であるADHIP，ANOMARYのHP（http://dancedelight.net/，http://www.anomaly.co.jp/）を概観するとヒップホップやストリートダンスの大会・イベントは，大きく２種類に大別できる。一方はソロでの即興によるダンスが中心と考えられるダンスバトルであり，もう一方は，グループで踊ることが多い振付を中心としたステージのショーやそのコンテストである。このことから，現在，日本においては，ヒップホップやストリートダンスを表現したり，競い合ったりする方法として，即興によるものと振付によるものの２種に大別できると考えられる。これまでの先行研究においてヒップホップやストリートダンスについて，即興，振付それぞれについて着目したものはみられるものの，即興と振付の違いに着目した先行研究は概観の限りない。

そこで，本研究は，ストリートダンスのうち，ヒップホップというスタイルを取り上げ，研究を遂行する。ヒップホップダンサーが，即興や振付に対してそれぞれどう認識しているか，また，それぞれを踊る際の注意点の違いを検証し，即興と振付の特徴に関する検討を目的とした。また，本研究では，対象者を初心者と熟練者に分類し，ダンス歴によるそれぞれの認識の違いについても比較検討を行うこととした。なお，本研究において即興とは，ダンスバトルやダンスセッションなど，観客の前で行うソロのダンスでの即興を指しており，振付とは，同じく観客の前でダンス作品として踊られるショーケースのうち，その一部分のフリではなく作品全体についての事を指している。

Ⅱ　方法

１．対象

対象者は，H県在住のダンス歴半年未満の初心者４名とダンス歴４年以上でかつ熟練者５名とした。いずれの対象者にも本研究の趣旨や目的方法を事前に説明し，調査の協力を得た。インタビュー調査に先立ち，いずれの質問にも不都合があれば拒否できること，調査の内容及び音声等の記録は，本研究以外に使用しないことを提示し，全ての対象者から了解を得た。また，調査の趣旨説明から実施までの間にラポールの形成に努めた。

２．手続き

１）調査日

2013年11月２～４日に調査を行った。

２）インタビュー調査

インタビューに先立ち，調査内容については，教育学研究科に所属し，表現・ダンスを専門分野とし，かつストリートダンスに５年以上携わっている大学院生２名と検討した。インタビュー調査の内容は，主にソロ・振付に関する質問とソロと振付との違いに関する質問であった。

調査場所については，調査者と対象者が１対１で対話できる静かな場所で行った。時間は１人15分～20分程度で行い，インタビューの方法として半構造化インタビュー調査を行った。実施にあたって，大まかな質問項目を設定し，会話の形の中で適宜話題を振ってあらかじめ設定した調査内容を聞きだした。対象者の説明が不明瞭な場合や，調査者と対象者間でのみ分かる固有名詞等に対しては，調査者が話の流れを止めない程度に補足や確認の質問を行った。対象の詳しい記述が必要である質的研究のインタビューにおいては，聞き手の現場感覚および，生成的視点が必要であるといい，実践知を聞きとる先行研究においては，聞き手が語り手と同様の経験を積んでいることが役立つと報告されている（會田，2008）。そのため，調査者は，対象者と同じ県でダンス活動を行っている筆者が行った。また，インタビューの場では，調査者は，対象者の語りに敬意と好奇心を持って臨み，語りに対して先入観を持たずに共感する態度を持ち合わせることを心掛けた（無藤ら，2004）。全ての発言は，apple社のipodを利用して録音し，使用したアプリはI Pro

Recorderであった。

３）文字起こし（逐語記録）

全ての対象者のインタビューの発言内容に関して，文字起こしを行い逐語記録を作成した。内容や言い回しが不明瞭な部分は，文脈や語りの意味をくずさないように調査者が補足，加筆・修正を行い表現を改めた。また，この様にして作成した逐語記録は，PDFファイルにして対象者に送信し，内容に恣意的な変更がないか確認を行った。

４）分析方法

逐語記録の中から，意味文節ごとに区切り，それについてラベルを付けた。この作業については，筆者と前出の大学院生で行った。また，このラベルの妥当性を保証するために，本学の臨床心理士資格を持つ教員がラベルについて検討した。

Ⅲ　結果及び考察

１．対象者のプロフィール

対象者９名のプロフィールを表１に示した。初心者はいずれもダンス歴７カ月以内である。一方，熟練者は，ダンス歴４年～10年であった。これまでの大会等への出場経験については，即興では，初心者は全員０回であり，熟練者では，4.5～30回であった。また，振付では，初心者は，全員在学中の大学での大学祭のステージの１回のみであり，熟練者は，30回～100回であり，地方レベルのゲストショーや，コンテストの全国大会の出場経験を含んでいた。また，熟練者のうち４名はダンスインストラクター経験を有している。

表１　対象者のプロフィール

分類	ID	ダンス歴	週当たりの練習時間	出場経験	出場回数	これまでの主な実績
初心者	A	6カ月	20時間	即興	0回	・なし
				振付	1回	・学園祭での振付
	B	6カ月	10～11時間	即興	0回	・なし
				振付	1回	・学園祭での振付
	C	7カ月	5～10時間	即興	0回	・なし
				振付	1回	・学園祭での振付
	D	6カ月	6～12時間	即興	0回	・なし
				振付	1回	・学園祭での振付
熟練者	E	6年	8～15時間	即興	20～30回	・ダンスバトル（地方レベル）ベスト4 ・ダンスコンテスト
				振付	50～60回	・ゲスト振付（地方レベル） ・ダンスコンテスト全国大会出場
	F	10年	2～6時間	即興	20～30回	・ダンスバトル（地方レベル）優勝
				振付	100回	・ダンスインストラクター ・ゲスト振付（地方レベル） ・ダンスコンテスト全国大会出場
	G	7年	4.5～5時間	即興	5，6回	・ダンスバトル（地方レベル）優勝
				振付	50～60回	・ダンスインストラクター ・ゲスト振付（地方レベル） ・ダンスコンテスト全国大会出場
	H	6年	1時間	即興	15～20回	・ダンスバトル（地方レベル）優勝 ・ダンスバトル（地方レベル）審査員
				振付	60～70回	・ダンスインストラクター ・ゲスト振付（地方レベル） ・ダンスコンテスト全国大会出場
	I	4年	12～16時間	即興	4，5回	・ダンスバトル（地方レベル）ベスト16
				振付	30回	・ダンスインストラクター ・ゲスト振付（地方レベル）

２．即興と振付に対する認識について

表２に初心者，熟練者の即興と振付それぞれに対する認識についての結果を示した。

表２より，即興について初心者は，「自己表現」であると捉えており，中には，「持ち味を発揮」すること，「アイデンティティ」を表現することであるとも認識されていた。

B：「自分持ち味を出して，（中略）というのが一つの魅力」
A：「ダンスの動きをみたら，誰が踊っているかすぐわかる人…そういう自分のアイデンティティを持っている個性あるダンス」

また，即興については熟練者も同様に「自己表現」であるとされ，「自己表現の場」としてとらえている。また，周りのダンサーから「承認得る場」であるともとらえられていた。

I：「ソロ（即興）は自分がやってきたこととかを認めてもらう場かなと思っている」

これらのことより，初心者，熟練者ともにヒップホップダンスにおける即興とは「自己表現」でありそれを発揮する場であると考えられているといえる。また，即興の中でダンサー自身がどういう踊りを好み表現するかという「アイデンティティ」を出していくこと，自分らしい「持ち味を発揮する」ことで周りのダンサーから「承認を得る場」であるともいえる。

一方，振付について初心者は，「グループの統率」や「グループの調和」と認識されていた。

B：「統率のとれた動き（中略）が魅力ある」
C：「周りと呼吸を合わせて踊らないといけない」

また，熟練者は，グループの「まとまり」の具体例として，「雰囲気」「音の感じ方」など初心者よりも詳細に「グループとしてのまとまり」をとらえたものもいた。また，熟練者は，グループの「まとまりの中でのオリジナリティ」を発揮するともとらえている。Hが「メンバーの各々の得意分野の発揮」としてとらえているように，グループの中でも各自が得意な動きや場面において力を発揮すべきであると考えられているといえる。

E：「雰囲気だったり，音の感じ方を一緒にするというのを意識します。」
E：「まとまりがあった上でオリジナリティを出す。」
H：「誰がこういう動きは得意とかっていう部分が一人ひとりあるので，（中略）自分の役割の時に発揮したりとか，いかに目立つかは考えています。」

また，熟練者にとってグループの「統率」，「調和」，「まとまり」を付ける際にルールを決めることに対して「我慢」をしているものもいる。

F：「ある程度自分も我慢しないといけない，グループで踊るこ

表２　即興と振付に対する認識の違い

分類	ID	即興	振付
初心者	A	・自己表現 ・アイデンティティ	・グループでの統率 ・調和の中でのオリジナリティ
	B	・自分の持ち味を発揮する場	・グループでの統率
	C	・自己表現 ・観客に魅せる	・グループでの調和 ・全体の圧倒感
	D	・自己表現	・グループでの調和
熟練者	E	・自己表現の場	・グループとしてのまとまりの中のオリジナリティ ・まとまりの具体例（雰囲気） ・まとまりの具体例（音の感じ方） ・グループのまとまり
	F	・自己表現 ・自己表現の場	・振付ルールへの我慢 ・全体の圧倒感
	G	・自己表現の場	・気持ちの共有ができる
	H	・オリジナリティの発揮 ・苦手分野の克服	・メンバーの各々の得意分野の発揮
	I	・ダンサーから承認を得る場	・グループとしてのまとまり ・チーム感

とで音が大きくなるので，そろえるために我慢しないといけない。」

これらのことから，初心者，熟練者双方で振付はグループの「統率」や「調和」，「まとまり」が必要視されているが，熟練者ではそのまとまりについてより具体的に「雰囲気」，「音の感じ方」などととらえられているものもいた。また，熟練者の中には，振付は，「メンバー各々の得意分野の発揮」の場であると同時に，得意分野ではない部分の統率には「我慢」が必要であるとも考えられる。

３．即興と振付を踊る際の注意点について

表３に初心者，熟練者の即興を踊る際と振付を踊る際の注意点についての結果を示した。

初心者は，即興で踊る際注意していることに対して「全力で踊る」，「音を聞く」，「動きのバリエーション」などに注意をしていた。

A：「全力でやりきること」
C：「できるだけ音を聞くようにはしている」
B：「振りが単調にならないように，縦を入れたら横とか，足ばっかりにならない等，同じ動きにならないかを気を付けている」

一方，熟練者は，初心者の「音を聞く」に対し，より具体的に「音取り」が早取りや遅取りにならないようにという部分まで意識が向いてている。

F：「僕は早取りをしがちな方なので気を付けている」
H：「音を外さないようにする。具体的には，曲に合っていないこと，早取りや遅取りにならないように気を付けている」

また，「気持ちを落ち着ける」ことに注意しているものがおり，気持ちが入りすぎると，「足が効かない」「力ずくになる」という表現のように自身のダンスをうまく踊れない状態になるといえる。

F：「気負いすぎないようになるべく落ちついて踊るようにしている緊張すると足が効かなくなる」
I：「気持ちが入りすぎると力ずくになってしまう」

また，身体の状態に関して「身体のバランス感覚」，「腰の動き」，「胸の動き」，「バウンス感」，など身体感覚や身体の動かし方に注視しているものもある。また，「オリジナリティ」を表現するために「個性，キャラクター」を最大限に発揮しようとしているものもいる。

F：「力を込めて踊りすぎると，身体が崩れることがあるのでバ

表３　即興と振付を踊る際の注意点

分類	ID	即興	振付
初心者	A	・全力で踊る ・恥ずかしさを払拭	・動きを揃える ・悪目立ちへの留意（ニュアンスの違い）
	B	・音を聞く	・動きを揃える ・呼吸を合わせる
	C	・動きのバリエーション	・動きを揃える ・悪目立ちへの留意
	D	・特になし	・振り間違えへの留意
熟練者	E	・オリジナリティ ・胸の動き ・腰の動き ・関節の動き	・動きを揃える ・振付のルールの順守
	F	・音取りへの注意（早取り） ・気持ちを落ち着ける ・体のバランス感覚	・動きを揃える ・振付ルールの順守 ・ルール上でのオリジナリティ
	G	・個性、キャラクターの発揮	・メンバーとの位置関係 ・力加減の強弱 ・移動部分
	H	・音取りへの注意（早取り・遅取り）	・振り間違えへの留意 ・力加減の強弱 ・移動部分
	I	・バウンス感 ・気持ちを落ち着ける ・即興の流れ	・見せ場 ・移動部分（目線獲得）

ランスに注意している」
E：「腰と胸あたりをすごく意識している。」
I：「ヒップホップを踊る際は，跳ねる，バウンス感が大切」
G：「キャラクターを設定して個性が発揮できればいい」

これらのことより，即興を踊る際に注意している点は，初心者では，「全力で踊る」ことや，「バリエーション」「音を聞くこと」に対して，熟練者では，自身の踊りへの意識が細分化し，「音取り」や動かす部位，身体バランスなど意識していると考えられるものが多かった。

一方，振付を踊る際に注意している点は，初心者は「動きを揃える」部分を意識しているものが多い。また，「悪目立ち」を回避しようとしているものもある。

A：「動きを合わせる，揃えることに注意している。そろっていないと汚く見えてしまうので」
B：「周りのメンバーと動きと呼吸を合わせることに気を付けている」
C：「全体が揃うことを一番に考えている」
C：「自己主張をしつつも出過ぎて悪目立ちにならないように気を付けている」

一方，熟練者は，「動きを揃える」部分が意識されているものの，ルーティーン[注1]とルーティーンの間の「移動部分」に注意しているものも多かった。熟練者は，ルーティーン部分のみならず，これに入る前の移動部分においても自身の踊りに注意しているといえる。

E：「集団ではある程度のまとまりがあることが前提」
F：「自分は苦手であるが動きを揃えることが必要」
G：「移動時に周りとぶつからないかや，その次にスムーズに踊れるように移動後の自分の立ち位置に気を付けている」
H：「振りに入る前の隊形移動の終わりとかに次のルーティーンを全力でいけるように準備している」
I：「ルーティーン後の移動のきっかけの時に，メリハリをつけてジャンプをしたり弾んだりして，自分にお客さんの目線が向くようにしている」

また，「力加減」については，ルーティーン内での力配分に気を付けたり，ステージの状況によって力を配分されていることもあるといえる。

H：「ルーティーン中に，パワーを出して踊る部分，抑える部分のメリハリを気にしている」
G：「踊るステージの広さによって，踊る大きさや力加減を調節する，特に小さいステージではコンパクトに細かく踊るように心掛けている」

これらのことから，振付を踊る際に注意している点は，初心者では，「動きを揃えること」が中心であるのに対し，熟練者は，「動きを揃えること」に加えて，ルーティーンの中での強弱や，ルーティーン部分以外についても意識がなされていると考えられる。

Ⅳ　小括

ヒップホップダンサーにとって即興は，自己表現であり，またそれを表現する場であるといえる。即興において自身のオリジナリティや持ち味を発揮することで他のダンサーからの承認を得ることができる。そのため，熟練者の中にはキャラクター設定をして即興に取り組むダンサーも存在する。また，即興を踊る際は熟練者ほど音取りや自身の動きについてより具体的な部分や身体の一部分を意識しているといえる。

また，振付を踊る際には，グループでルーティーンを揃えて踊ることに注意してダンサーは踊っている。これについて先行研究では，中学生の体育授業で「振付を覚え」「みんなで一緒に」「曲に合わせて」「間違えずに上手に」踊れた時に生徒は楽しさを感じていることが報告されている（内山，2013）。ヒップホップダンサーにおいても同様に振付を間違えず揃えることに楽しさを見出している可能性がある。しかしながら，熟練者にはこの全体の「まとまり」のためにルールを順守することを「我慢」ととらえているダンサーもいる。初心者は，「悪目立ち」という文言を使ってルーティーンの中で目立ちすぎないようにしているものもいた一方，熟練者はルーティーンの中で「まとまり」を崩さない程度に自分らしさを発揮するという意味で目立とうとしているといえる。また，熟練者は，振りつけ以外の移動部分に着目しており，初心者よりもショーの全体に対してより多面的に意識を向けられているといえる。

このように，ヒップホップダンサーにとって，即興と振付はそのとらえ方，認識が異なり，同じヒップホップダンスであってもその性質や目標，特徴などが違ってくると考えられる。

Ⅴ　まとめ

本研究では，ヒップホップダンサーの即興と振付に対する認識の違いについて，インタビュー調査を用い検討を行った。

ヒップホップダンサーにとって，即興は自己表現するダンスであり，振付はグループで揃えて踊るダンスである。また，初心者と熟練者のインタビューを比較した結果，熟練者の方が自身のダンスや作品についてより具体的に多面的にとらえていると考えられる。

注

注１）ルーティーンとは，ダンス作品のうち，グループの全員もしくは，数名で踊る決められたフリのある部分のことを指している。

引用・参考

會田（2008）ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究：国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに．体育学研究53：61-74

ダンスインストラクター協会（2012）みるみる上達する！ストリートダンストレーニング．日東書院：東京

井上さくら（2012）たのしいHIP-HOPダンス入門．ベースボールマガジン社：東京

SAYAKA（2011）はじめてでもすぐ踊れる！ヒップホップダンスfor kids．ヤマハミュージックメディア：東京

清水大地（2011）ストリートダンスにおける即興的創造過程．認知科学：19（２）：240-243

杉浦大介（2011）小学生のためのカッコカワイイなりきりダンス〈Vol.2〉ヒップホップダンス編－目標８時間!!．民衆社：東京

高田康史，松尾千秋（2013）現代的なリズムのダンスの授業の学習内容に関する検討－中学生のステップ習得成果に焦点づけて－．舞踊教育学研究（日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会），15：13-22

高田康史，松尾千秋（2012）ステップ習得を含む現代的なリズムのダンスの授業が生徒の運動有能感へ及ぼす影響．舞踊教育学研究（日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会），14：３-13

田中祐典，齊藤剛（2013）モーションキャプチャを用いたダンス上達支援システムの開発．全国公演論文集（１）：225-227

内山須美子，松尾健太，奥山美希（2013）ダンス学習の動機づけに関するテキストマイニング分析－中学生の「現代的なリズムのダンス」の授業を事例として－．白鴎大学教育学部論集：７（１）：71-108

内山須美子（2007）ストリートダンスの授業構成に関する研究．白鷗大学論集：21（２）：265-291